

## 歯学部大型改修工事（第1期工事） を終えて

歯学部長 前田 健康

平成25年当初から開始された歯学部大型改修第1期工事を無事完了することができました。歯学部校舎は昭和48年竣工で、当時としては珍しく、全館空調設備を備えた校舎でしたが、すでに建築後約40年経過していました。また昭和54年の歯学部学生定員増（40名→80名）を受け、増築を進め、現在のような動線の長い建物配置となっています。社会ニーズに対応した教育・研究体制の整備、人材育成、医療変革に対する対応、新たな教育ニーズへの対応、学際的研究やトランスレーショナルリサーチの展開など歯学部をとりまく環境が変革する中、新潟大学歯学部はGP事業、概算要求事業や科学研究費等の外部資金の獲得を進め、時代に対応した組織改革、教育改革を進めてきました。しかしながら、40年以上前に計画された既存施設と現代ニーズの乖離はますます広がるばかりで、教育・研究施設の分散化による教育・研究の非効率化、学生アメニティスペース不足による学生サービスの低下、女性の急増による女性研究者育成の妨げ、旧来設計による再編した教育・研究組織の機能不全、仕切りの多い研究室による学際型研究への障害、共通スペースの不足に伴う大型機器の分散による高度な学際的研究、学外研究者の受入れの妨げ等々の問題がありました。また、当然のごとく、施設の老朽化は進み、水漏れ事故の

頻発、光熱水費の増大などの問題もありました。また、既存施設と病院再開発施設との地理的問題も浮上し、教員、学生の動線の複雑化かつ延長も大きな問題で、早急な校舎改修が望まれていました。

国家財政の緊縮化の中、本学施設部の多大なご尽力により、平成24年度政府予算により、歯学部校舎大型改修第1期工事（B'、C、D、D'棟）が平成25年当初より開始されました（この間の流れは歯学部ニュース平成24年度第1号（第121号）で既報）。歯科外来棟の移転後の研究分野の玉突き移転、移転費用の確保、工事期間中のE棟での漏水事故等々、今になれば懐かしいことが思い出されますが、無事、第1期工事が終了できたことは、教職員、学生のご協力はもとより、施設部、歯学部事務職員の方々のお力添えのたまものと考えています。特に、学部長に話せば一喝してNOといわれる無理難題な案件（たいていは自己資金がないのに、何とかして欲しいという案件）を辛抱強く聴取し、学部長と分野間（意外とハードな若手教員もいたとのこと）に挟まれ、ご苦労された事務職員の方々には、厚く御礼申し上げます。まだまだ第2期、第3期工事と続きますが、歯学部構成員の皆様、施設部の方々のご協力をお願いする次第です。

## う蝕学分野

# 風通しの良い研究室と実験室

総括医長 吉羽 永子

歯学部大型改修にあたり前田先生（学部長）が幾度も開催して下さった歯学部全員集会により、当分野における全員参加型設計環境が整いました。前田先生からの課題「50年後の歯学部を考える」は、「50年後のう蝕学分野も考える」ということであり、当教室員はその路線で知恵を出し合いました。

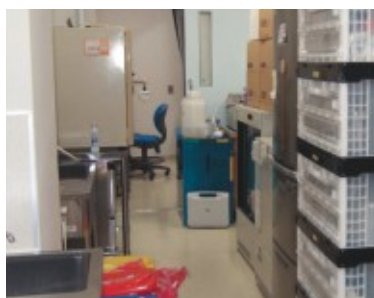
### 【実験室】

う蝕学分野は「保存修復学」と「歯内療法学」の2分野を担当することから、研究分野も多義に渡ります。各研究で所有する実験器機等から大まかなスペースを割り振り、共通して使用する器機の動線を考えた配置の後には、現場主義としました。実験室のキーワードは、「西日を避けて東側」と「丁度よい狭さの実験室」です。廊下を挟んで東側全てを実験室とし、廊下に面してドアを2箇所設け、緩やかに分けた4つのスペースは中通路でつながっています。中通路には、流し台、浄水器、製氷機、冷蔵庫など、共通して使えるものを配置してあります。個々の作業スペースも確保してあり

ますが、共通の作業スペースもあります。ここは作業時以外の物の放置は厳禁です。そのため周囲には個人の実験器具を収納する為のスペース、薬品、器具類などが、丁寧なラベリングと共に整備されています。皆さんの知恵と工夫による、使い勝手の良い「丁度よい狭さの実験室」です。

### 【研究室】

研究室のキーワードは、「老若男女皆一緒に」です。当分野は臨床講座であり、外来であった出来事や症例等に関しては、1人で抱え込むこと無く話し合える環境にあります。研究・外来・教育・その他において、老は若からパワーをもらい、若は老から忍耐を学びます(笑)。事務の目黒さんお薦め「床設置型の棚」は天井までスペースを利用できます。教室員皆さんのおかげで、風通しの良い実験室と研究室になりました。これもひとえに、前田先生をはじめ、事務の方々、特に吉田さん、そして目黒さんのお力があったのことに、教室員一同、心より感謝し御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



使い勝手の良い棚の並んだ研究室（写真上段左）。実験室は緩やかにゾーニングされ、中通路（写真上段中央）の左突き当たりには顕微鏡スペース（写真下段左）と培養スペース、その手前には遺伝子を扱うスペースがある（写真下段右）。共通実験室（写真上段右）の作業台には「使用後全て片付けること」のテープが貼られており、さらにこの右側には材料班の実験スペースがある

# 歯科矯正学

## 歯科矯正学分野の設計

歯科矯正学分野医局長 福井 忠雄

我々の医局は C 棟 4 階から仮設医局 (E 棟 2 階旧歯病小児歯科診療室) での約 6 ヶ月の間を経て C 棟 3 階に引っ越してきました。当分野は 30 人程度の比較的大きな医局であるため、限られたスペースで各人のワークスペースと研究・教育に必要なスペースを確保することが一番苦慮した点です。各人に机と収納ラックを割り当て、最終的な配置は図に示すように教授室、演習室、第 1、第 2、第 3、第 4 研究室、分析室、と少し離れた位置に図書・セミナー室 (う蝕学分野との共有) を配置しました。

第 1 (定員 3 人)、第 2 研究室が教員と 7 年目以上の先生の部屋 (定員 9 人)、第 3、第 4 研究室が若手医局員と大学院生の先生の部屋 (定員各 9 人) です。第 3、第 4 研究室の収納ラックと机は歯科

矯正学教室同門会からのご支援によって整備されました。

演習室にはコピー複合機と HIS 端末を設置。さらに大型シャーカステンを配置し大学院生の術前症例検討や治療途中の症例チェックが行える臨床教育の場として整備しました。

分析室には、写真・トレース等の取込み用 PC・スキャナー、模型等の三次元計測・分析装置や蛍光顕微鏡、セファロ自動計測装置などを設置し、研究の場として整備しました。

図書・セミナー室はう蝕学分野と共有スペースです。大型電動スクリーンを整備し、人数 10 人以下のセミナー等が行えます。新人教育・大学院生教育、研究打ち合わせ等に利用しています。

歯科矯正学分野 配置図



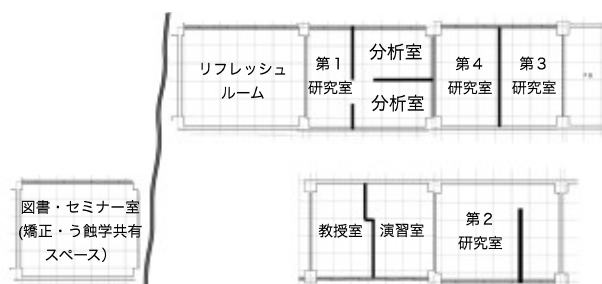
第 1 研究室



分析室



第 3、第 4 研究室  
(机・収納ラックはほぼ同じ配置です)



図書・セミナー室



演習室



第 2 研究室

## 包括歯科補綴学

# リフォームを見据えての間取り設計

包括歯科補綴学分野 五十嵐直子・田中みか子

我々の研究室は、C棟5階から真下の4階へ移動しました。平成26年度に新教授就任を控えているため、事前に学部より今後のリフォームにフレキシブルに対応できる設計をするよう求められておりました。したがって、極力部屋を壁で仕切らない方針で設計をしました。その結果、廊下をはさんで相対する2つの大部屋を中心として、その大部屋に通ずる内ドアを備えた教授室と准教授・講師室をそれぞれ配置しました。また耐震壁のために独立してしまった小さい一室には図書およびロッカーを置き、現在のところ多目的に使用しております。また将来に部屋を仕切る可能性を見据え、大部屋にはドアを多く設置しました。

二つの大部屋には、それぞれ部屋の中に居住スペースと実験スペースが配置してあり、移動可能な什器で機能的に間仕切りしました。大部屋で壁が少ないことから、コンセントやLANの開口を設けにくく、それらの開口を天井に設置して上からケーブルを垂らしました(写真1)。これにより、LANと電源のケーブルが床や壁を這ってホコリを被ることもなく、電源、LANケーブルが個々の

機器にすっきり接続されました。さらに将来のレイアウト変更にも対応できるよう、ダクトレール(電源の位置を動かすためのレール)も設置しました。

引っ越してから4ヶ月が経ちましたが、共有スペースやリフレッシュルームも有効に機能し、快適な居住空間となっております。大部屋とはいえ、個々のデスクをパーティションで仕切り、狭いながらも分野構成員それぞれに占有スペースが確保され、よりデスクワークに集中できる環境になったと思います(写真2)。

しかし全体的に見ると、大胆な発想の転換とはいえ以前の研究室とあまり変わっていないのでは?という声も聞かれます。確かに他分野の居室を見せていただくと、ほかにもいろいろなアイデアがあったのだなと感心させられます。これから設計をされる方には、事前にいくつか部屋を見てから設計されることをお勧めいたします。よろしければ当分野の研究室も何かのご参考にしてください。



写真1 天井に設置した電源とLANの開口部。ケーブルを床に這わせることなく、個々のパソコンとすっきり接続することができました。



写真2 個々のデスク間の仕切り。書棚と一体化した既製のパーティションを購入して配置しました。それぞれが席に座ると視界が区切られ、仕事に集中できる空間となります。



# 各分野の設計

大学院医歯学総合研究科・ 魚 島 勝 美  
生体歯科補綴学分野教授

大型改修後の移転による分野占有面積の減をどのように吸収するかを考えた時、先ずは収納スペースをいかに確保するかが問題でした。当分野が使用するスペースは旧歯学部食堂跡地の真上で、間に廊下を挟んで両側に居住スペースを確保する場合とは異なり、全体として四角形の広いスペースです。通常、医局員の所有する物のうち大きなスペースを必要とするのは書籍の類ですから、部屋を細かく区切って壁面を収納スペースに用いることを考えました。ところが、部屋を区切れば区切るほどそれぞれの部屋にアクセスするためのスペース、すなわち廊下に当たる部分が必要となり、それだけデッドスペースが増えることとなります。この点で、占有スペースにはカウントされない廊下を挟む構造が有利です。そこで発想を変えて、占有スペース内は一切区切らずに、将来の様様替えも簡単に行えるオープンスペースとすることにしました。その代わりに、収納スペースを各医局員の机の前面上方の空間に設けることができる棚を導入しました(写真1)。ただし、実験

室はオープンスペースに含めることが妥当ではないと考えましたので、実験室2部屋に限っては壁で仕切って、居住スペースとは隔離可能とすることとしました。

当分野の設計をする段階でもう一つ問題となったのは、廊下を挟んで一か所だけ飛び地として存在する部屋の使用方法でした。実験室として2部屋に仕切るには狭すぎ、医局員の居室として使用するには広すぎました。また、この部屋を使用する医局員と大部屋を使用する医局員とのコミュニケーションを考えた時、どのように医局員を配置するかも難しく、結局この飛び地は少し広い教授室とすることとしました(写真2)。教授は孤独です。ただし、「少し広い」に惑わされて教授室内の一角に壁で仕切った応接室を設けたことが失敗で、当初のイメージとは異なり、とても狭くて応接室としては使えないと思われる代物が完成しました。私の居住スペースは問題ないのですが、応接室はいかがなものか……。物置か私の寝室になりそうです。一部では説教部屋と呼ばれています。



写真1：オープンスペース内窓際に配置して棚で仕切られた医局員の机



写真2：左手前が隔離された教授室。奥がオープンスペースの居室と仕切られた実験室

## 生体組織再生工学

# 生体組織再生工学分野の設計

生体組織再生工学分野准教授 大川 成 剛

当分野には、大型実験装置があるため旧生体材料学分野の部屋配置を基に各部屋を設計した。ただ分野に割り当てられた占有面積が減少したので、大型実験装置や分析機器をどのように配置するか図面上で試行錯誤し、従来二つの部屋に入っていた実験装置を一つの部屋にまとめることにした。その結果、鑄造工作室、表面分析室、結晶構造解析室、元素分析室、固体試料調製室と液体試料調製室・図書室の各部屋を設計することとした。表面分析室は恒温室仕様となるため壁に断熱材を入れた。また、実験装置に必要な電源、給排水設備等には、従来どおりの実験電源盤と床ピット（溝）を各部屋に設計した。その際、発展的な実験や新しい機器の導入および将来のレイアウト変更にも対処できるように考慮した。特徴的な設備として、ストーンテーブルを設計した。これは石製の作り机で、耐荷重があり耐振動性に優れているので精密な計測には欠かせない。また、省エネ対策として、部屋の照明を分割できるようにした。スタッフや大学院生などの居室と実験する部屋を

区別し、居室を一つとした。これらを設計の基本とした結果、床ピットが天井ラック方式に変更になった以外はほぼ設計どおりに施工されることが了承された。天井ラックの設計に当たっては、机や実験装置等のレイアウトを変更した際にも十分に機能するように考慮した。また、各部屋の照明スイッチ等の高さゾーンについても使い易さを優先した。設計完了後、教授が赴任することになり、教授室、免疫染色室と細胞培養室の設計が必要となった。そこで、元素分析室と固体試料調整室および液体試料調整室の設計変更をおこなった。このとき先見的な基本設計のおかげで最小限の手直しで済んだこと、また、学部事務と施設部の担当者および工事担当者のご協力により短時間で設計変更が完了した。この場をお借りして、関係者各位に心から感謝の意を伝えさせて頂きたい。机や実験装置等の設置は、最終的に現場合わせとなったところもあったが、概ね設計通りであったことに満足している。



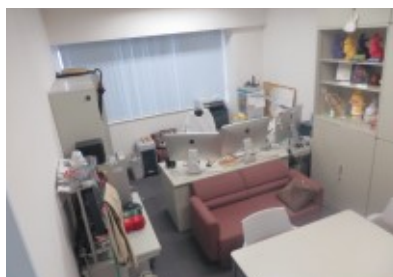
## 摂食・嚥下リハビリテーション学

# 摂食・嚥下リハビリテーション学分野の設計

摂食・嚥下リハビリテーション学分野教授 井上 誠

私たちの分野は、これまで旧口腔生理学実習室を改装した大部屋に居を構えていました。そのため部屋の間仕切りがなく、個室や実験スペースが取れないなどの不都合を強いられてきた一方で、医局員全員が一度に見渡せる大部屋は、コミュニケーションを容易にとるためには良かったとも実感しています。歯学部改修第1期工事完了後には、C棟5階に収まることとなり、教授室(図1)、教員室(図2)、医員・大学院生室(図3)、図書室(図4)、実験室(図5)が確保できました。部屋自体に大きな工夫はありませんが、机を壁につけずに向い合せにすることで、より話しやすい環境となるよう配慮しています。分野研究の根幹である動物ならびにヒト生理学実験は、学部共有スペースを使って行うことができるようになったこ

ともあり、広くなった居室としての環境はよいと思っています。一方で、C棟の改修にあたっては、耐震設計上、壁や柱などを残さざるを得ず、大部屋を設けることができませんでした。教員室と医員・大学院生室を分けたことで、教員と医員以下のスタッフとの交流が乏しくなった感があります。私たちの臨床(摂食・嚥下リハビリテーション)は、一人の患者様を医師、歯科医師、看護師、歯科衛生士、療法士、栄養士など多くのスタッフがチームを形成することで成り立っています。その上で、コミュニケーションを図る場が分けられてしまったことは少し残念ですが、その分、リフレッシュルームを活用するなどして、分野だけでなく、隣接する予防歯科学分野や小児歯科学分野の先生方との交流ができています。



## 予防歯科学分野

# 歯学部大型改修第1期工事完了について：各分野の設計

予防歯科学分野助教 金子 昇

予防歯科実験室は、疫学調査に使用可能な細菌学的検査法の開発、およびその検査を実施するための環境を整えることをコンセプトとしております。決して高度な実験設備があるわけではありませんが、安全キャビネット（写真1）やスパイラルプレーター、サーマルサイクラー、プレートリーダーなど、基本的な実験器材を備え、機能的に配置しています。

今回の大型改修では、予防歯科実験室を1つの大部屋にまとめることができました。以前は大部屋と小部屋に分かれていて、例えば唾液サンプルを培地に接種するときはこちらの部屋、その培地をインキュベートするのは別の部屋、コロニーを数えるのはまたこちらの部屋というように、サンプルや培地を持って廊下を移動する必要がありましたが、今回の改修でその問題を解消することができました（写真2）。

大部屋といえば、教員と大学院生および研究生が一堂に会する居室も写真の通りです。予防歯科の研究範囲は広く、新潟地域、日本のみならず国外のあらゆるところで口腔保健研究が執り行われています。いわゆるヒューマンスタディですが、人がいるところはどこでも研究の場となります。得られたデータは持ち帰って分析・解析していくわけですが、その時に教員や院生が入り交じっている方が能率なことや、解析技術の移転などがやりやすいことを考慮して大所帯の研究室としました（写真3、写真4）。

予防歯科学分野はWHO口腔保健協力センターの役割を担っておりますが、歯学部の耐震改修工事が進行中ということもあり、現在は准教授室に併設されています。WHO口腔保健世界戦略の策定資料や途上国保健支援に関する資料がここに収められています（写真5）。



写真1



写真2

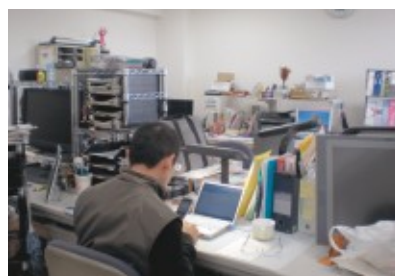


写真3

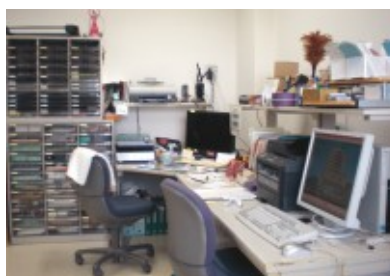


写真4



写真5



## 小児歯科学

# 小児歯科学分野の設計～30年後を考える～

小児歯科学分野准教授 齊藤一誠、助教 岩瀬陽子

新潟大学に赴任して間もない頃でしたが、大型改修に関して学部長からいただいたお題は、「30年後の先生が使える医局を作りなさい」でした。各科の配置、割り当ての敷地面積から、以前は講義室になっていた大きなスペースを、医局として改修することになりました。今までに見た医局内の風景はどこも同じで、比較的小さい部屋に区切られ、無機的な机と高い棚で迷路のような通路、高く積まれた専門書、カーテンで遮光された暗い部屋など、ある種特殊な環境でした。しかしこれらのすべてが見慣れた風景で、特に不自由を感じることもありません。逆に、未だ生まれてもない将来入局するであろう先生方が使う医局をなかなかイメージできず、非常に悩みました。イメージを膨らませるために、ウェブサイトから、今話題になっている企業のオフィスを調べたり、ドラマの中に出てくるオフィスを何度も見返したりもしました。さらに、広いスペースでできること、できないことについて、五十嵐キャンパスの施設担当の方や業者さんから直接お話を伺いました。

今、世の中ではオープンスペース・フリーアドレスといったオフィスデザインがキーワードのひとつですから、医局にもそれを取り入れることにしました。というのも将来的にはワークシェアリング等が進み、今より多くの人員が医局に出入りする可能性もあります。限られた空間を有効に使用するためにはより自由度の高いデザインの方が

有利であると考えました。また、冬場に曇りがちな新潟では、日光を極力取り入れることができるように、高い遮蔽物や壁をなるべく少なくする必要があります。そのため、広いスペースは小さな部屋に分けることをせずに、オープンスペースとして使用し、光を吸収してしまう黒系の棚や壁は極力無くしました。また、すべてがオープンスペースというのも難しい側面もあるため、3つ小部屋を作り、壁は光を遮らないようにガラスパーティションを使用しました。壁面が少なくなるために、電源やコード類はOAフロアにすることで対応しました。フリーアドレスに関しては、大勢がシェアリングすることが可能である反面、個人の荷物の置き場に困る側面もあります。しかし、以前はどんどんたまっていた雑誌も、いまやオンラインジャーナルへの移行が進んでいます。写真やスライドもデジタル化され、随分と省スペース化を図ることができます。個人の荷物が最小限収納できるだけの棚をパーティションとしても使用し、室内の壁面は可及的に収納棚を設置することでその問題に対応しました。現在のところは人数の関係上固定制で使用していますが、将来的にはフリーアドレスへの変更を考えています。

引っ越しは8月末で、当科の改修工事の完成が遅れ、また、季節柄繁忙期の小児歯科では、なかなか準備が思い通りにはいきませんでした。足かけ1年5ヶ月の期間で何とか無事に移転を終えることができました。



医局となる広いオープンスペース



ガラスパーティションにより区切られた小部屋



可及的に収納棚を設置し、OAフロアでコード類を整理

## 口腔生化学

# 口腔生化学分野の設計

口腔生化学助教 相 田 美 和

口腔生化学分野はC棟の7階から6階へ移動しました。と書くとあまり変化がなさそうに見えますが、部屋の数、サイズや形が違うため、改修前とは大きく異なるものとなりました。

ウェットの研究を主とする分野ということで、教授室と医局以外の3部屋は実験室となっており、実験室は、生化学1研：生化学実験全般、生化学2研：遺伝子組換え実験室、生化学3研：細胞培養、と実験の種類で分かれています。

生化学1研は幅10mに及ぶ横長の部屋を活かした、対面式実験台3台が平行に並んだ広い実験室で、3班に分かれて行なう歯学科2年生の生化学実習の1班は、ここを使う予定です(写真；1研)。写真(1研一演習中)は2年生基礎化学演習時のもの。また、この部屋はドラフトを設置して有機

溶剤等の薬品の取り扱いができる部屋となっています。生化学2研はP1レベルの遺伝子組換え実験室として、新潟大学遺伝子組換え実験安全委員会に承認されました(写真；2研)。生化学3研は2つのスペースに仕切り、片方をクリーンベンチやCO<sub>2</sub>インキュベーターなどを配して細胞培養の操作を行なう部屋(写真；培養室)、もう片方を培養だけでなく他の実験でも使用する共通機器を使用する場所としました。

実際に移転した時の第一印象は、改修前と同じ建物とは思えないくらいに全体が明るく広く感じる！でした。移転して数ヶ月経ちますが、どの部屋も順調に機能しています。設計にあたり御助力いただいた事務および施設課の皆様感謝いたします。



1 研



1 研一演習中



2 研



培養室

## 口腔生命福祉学

### C棟7階より

#### 口腔生命福祉学講座（口腔保健学分野・福祉学分野）

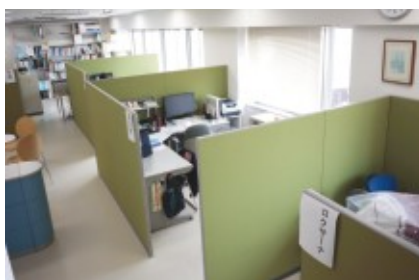
歯学部大規模改修工事の第1期目として口腔生命福祉学講座はC棟の7階に移転しました。当講座の教員は教授7名を含む16名で構成されており、移転前は歯学部病院時代の病室跡を研究室として使用し、数名単位で分散しておりました。また、口腔生命福祉学専攻（博士前期・後期課程）21名分のセミナー室、研究室も有しています。

移転にあたり、教授を含めたワンフロアの研究室を構想し、準備をすすめました。柔軟なレイアウト変更を可能にするOAフロアにし、電気・電話・LANなどの配線を床下に収納し、高さ150センチのパーティションで各教員の執務スペースを区切りました。この高さは座っている状態ではプライバシーが確保されつつ、立てば顔の見える高さになります。また、コーナー机を配置しデッドスペースが少なくなるように配慮しました。

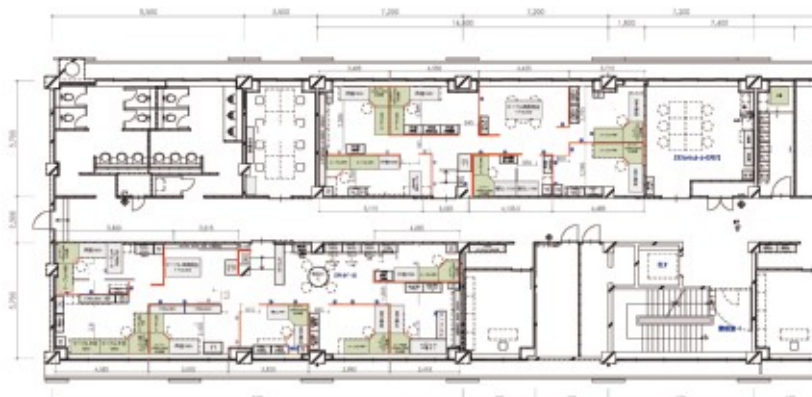
この配置を検討する際に具体的なレイアウト案

を作成していたことが役に立ちました。具体的なレイアウトを決める際には、各教員手持ちの書庫を拋出していただき、どこにどの書庫がくるかなど詳細なレイアウトを作成しました。

さて、移転にあたり、うまくいったことをご紹介します。移転前には徹底的にモノを処分してもらいました。かさばる学会誌などは共通化し1冊を共有書庫に収めることとし、共有以外の書籍は移転前に資源リサイクルにまわしました。研究室内のスペースを確保するためリフレッシュルームを活用し、飲食や休憩、簡単な打ち合わせなどはここで行うことにしました。このような取り組みで、今まで以上に教員間の意思疎通が図れるようになったと感じます。これから、次の改修も続きます。我々も学生の教育環境整備が残っています。これからも協力しながら大型改修に関わって参ります。



研究室内の様子



研究室内レイアウト



# 歯学部大型改修第Ⅰ期工事完了について： 共有スペースについて

歯学部事務室長 吉田 恵太郎

総合研究棟（歯学系：歯学部校舎）改修工事（第Ⅰ期）工事が平成25年9月10日に無事竣工しました。

B'、C、D棟配置の講座の引っ越し作業も無事終了し、快適な環境での教育研究活動が行われています。

今回の大型改修における共有スペース等に関することについて、少しだけ述べさせていただきます。

現在、文部科学省では、第3次国立大学法人等施設整備5ヶ年計画に基づき、老朽改善整備、狭隘解消整備、大学附属病院の再生が行われているところです。

歯学部の改修工事では次のような基本的な考え方から行われています。

## 効果的な改修による教育研究の活性化

### 質的向上への戦略的整備

- ・学生が自由に利用可能な情報収集の拠点や、学生や研究者の交流を促す場を提供
- ・課題探求・問題解決型学習を支援するスペースの創出
- ・コミュニケーションスペースの充実
- ・学生や研究者の交流を促進

### 環境への配慮

- ・断熱材や複層ガラスの使用による省エネ
- ・老朽化した空調設備を改修し、空調効率を改善するとともに、快適な室内環境を確保

### 安全な教育研究環境の確保

- ・B'棟、C棟の耐震化

### 施設マネジメントの推進

- ・スペースの弾力的・流動的な活用による教育研究の活性化



新しく大きくなった歯学部正面玄関。ルーバーの色との調和を考え、新潟大学歯学部のロゴはシックな焦げ茶色にしています

- ・講座・分野毎に固定化した研究室や点在した講義室等の配置を見直し、共同利用スペースを確保
- ・異分野の研究者・学生コミュニケーションの促進

歯学部でも施設マネジメントを推進させるために全体の改修計画面積の20%を共有スペースとしています。

この共有スペースについては、講座・分野毎に固定化した研究室や点在した講義室等の配置を見直し、共同利用スペースを確保するという基本的な考え方に基づき行われ、抜本的なゾーニングの見直し等により効率化と活性化を図っています。特にC棟の改修工事ではエントランスを大幅にリニューアルし、入り口右手に134㎡ものアメニティスペースを配置しました。

全体の改修工事が完了すると、エントランスからのフロアは学生の講義室等が集約化され、このアメニティスペースが学生や研究者の交流の核となり、利用されることが期待されています。

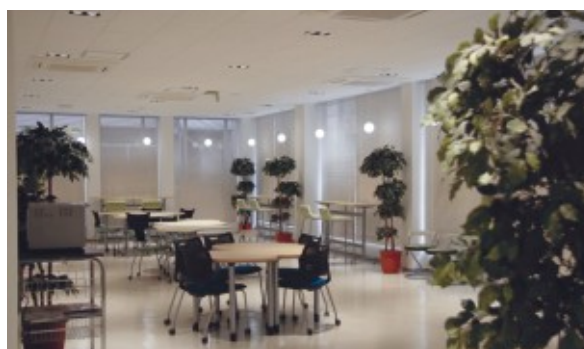
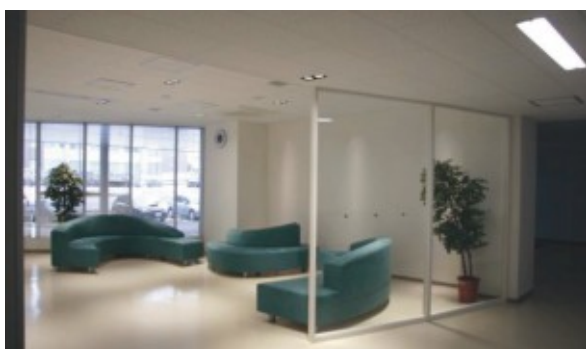




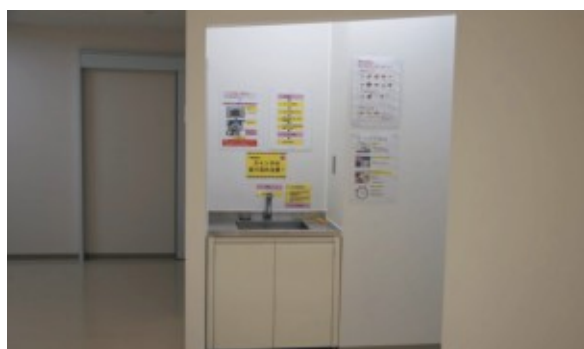
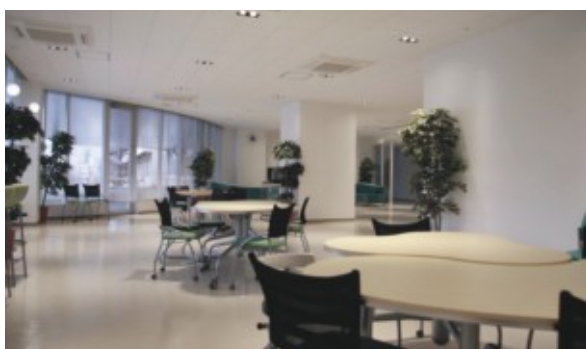
正面玄関わき風除室には立体的処理のグリーンのボードにステンレスのロゴで学部、研究科の表記を行いました。ダウンライトの影が立体感を増しています



学部長室の壁面にもステンレスのロゴを配置しました。国際交流等の来客者の記念撮影場所にも活躍しそうです



正面玄関を入ってすぐ右手に134㎡のアメニティスペースを配置しました。空調設備も用意され、学生、研究者の憩いのスペースになっています



アメニティスペース脇の流しには配水管にディスポーザーを設置し、食べ残し等を破碎して、処理するようにしました。配管のつまり防止、生ゴミ処理軽減に威力を発揮しています